OUKA
Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 漢語形容動詞を前要素とする臨時的な複合語に関する研究 |
| Author(s) | 蔡, 珮菁 |
| Citation | 大阪大学, 2009, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/49412 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【36】

| | |
|---|---|
| 氏名 | 蔡（サイ）　珮（ハイ）　菁（セイ） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（文　学） |
| 学位記番号 | 第　２２６１７　号 |
| 学位授与年月日 | 平成21年３月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当<br>文学研究科文化表現論専攻 |
| 学位論文名 | **漢語形容動詞を前要素とする臨時的な複合語に関する研究** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>准教授　石井　正彦<br>（副査）<br>教　授　土岐　　哲　　教　授　真田　信治 |

## 論文内容の要旨

本論文は、「形容動詞と（動）名詞とのむすびつき」を対象に、その「連語」の形式（「A的なB」「Aな・のB」「AにBする」）と「臨時的な複合語」の形式（「A的B」「AB」）との、主として新聞における使用状況を計量的に調査することによって、語構成レベルの観点から、臨時的な複合語の成立可能性を論じたものである。その構成は、３章からなる本文に、「序論」及び「結論」と、付表・参考文献等を付したもので、A４判 96 ページ、400 字詰め原稿用紙換算約 350 枚より成る。

第１章では、交替可能で、シンタグマティックな臨時一語化や脱臨時一語化に無関係な「A的なB／A的B」の使用状況を、『毎日新聞』コーパスの社説本文３年分を資料に、規定的な係り受け関係の有無を考慮しながら調査し、臨時的な複合語「A的B」が最も活発に選択・使用されるくみあわせは、「A」「B」が共に２字漢語の体言類、特に、非用言的体言類どうしのくみあわせであること、および、このくみあわせは、既存の語構成において最も安定的・生産的なタイプに一致・対応するものであることを述べる。

第２章では、「（接尾辞「的」をもたない）２字漢語形容動詞と２字漢語の（動）名詞とのくみあわせ」について、同じく『毎日新聞』コーパスの全紙面本文６年分を資料に、それが連語であるか複合語であるか、複合語であるものは恒常的か臨時的かを調べ、使用例の多い上位 100 語の形容動詞を「非複合型」、「恒常型」、「複合型」、「臨時型」に分類するとともに、「非複合型」には、感情や主観的な評価・判断を表す形容動詞が多く、「複合型」には、客観的な属性を表す度合いの強い形容動詞が多いこと、一方、「恒常型」に属する形容動詞は少なく、また、その恒常的な複合語は、古めかしい複合語か特定の分野の専門語であって、新たな語形成の「型」とはなっていないこと、さらに、「臨時型」は、客観的な属性を表す度合いが強いという点では複合型と共通しつつも、新聞テクストの中でのみ臨時に複合語化される背景を持つものと考えられること、を述べる。

第３章では、考察の対象を、臨時型の形容動詞の中でもとくに生産的な「正式、大量、主要、独自」の４語に限定し、それらと、連語・複合語両方の後要素になる（動）名詞とのくみあわせにおいて、臨時的な複合語の成立可能性を検討し、「主要」は、体言類（N）とのみむすびつき、ほとんどの場合、臨時的な複合語になること、「大量」は、体言類（N）とくみあわさるとほぼ連語になり、用言類（VN）とくみあわさると臨時的な複合語になる場合がやや多いこと、「独自」は、体言類（N）と用言類（VN）の両方とむすびつくが、４語の中では、もっとも臨時的な複合語になりにくいこと、「正式」も、同じように体言類（N）と用言類（VN）の両方とむすびつくが、制限的な修飾関係では臨時的な複合語に、非制限的な関係では連語になりやすいという傾向が観察されること、を述べる。



## 論文審査の結果の要旨

本論文は、連語と交替可能な「臨時的な複合語」に注目し、とくに「形容動詞と（動）名詞とのくみあわせ」について、それが（連語ではなく）複合語として成立するための語構成レベルの諸条件を解明しようとするもので、近年注目されつつある「臨時一語」の主要なタイプの一つを扱い、現代語の語構成論における最先端の問題を論じたものとして、まずは、その独自性を評価することができる。また、このテーマは、語構成論にとどまらず、連語論、構文論、文章論の領域ともかかわる射程をもつが、そうしたかかわりを整理し、その上で、語構成論の問題として論じる意義、方法を明確化していることも適切である。さらに、コーパス言語学・計量言語学の手法を用いた大規模な実態調査にもとづいて、数字に裏付けられた堅実な論を展開していることも、臨時的な複合語の成立可能性をもっぱら内省によって云々する研究が散見される中で、実証的な研究の有効性を示していて秀逸である。これらによって、本論文は、自由変異的な関係にある連語と臨時的な複合語との使い分けという、直観をはたらかせにくい問題に対して、説得力のある結論を得ることに成功しており、この方面の研究に大きな貢献をなしたと言ってよい（本論文の一部は、日本語学会の機関誌『日本語の研究』に掲載されている）。

ただし、そうした結論は、現在のところ、あくまで、本論文が設定した観点・方法・データの範囲内で言えるものであり、語構成の分析としても限定的なものである。連語論・構文論・文章論にかかわる諸条件の解明はすべて今後に残されており、漢語の影響をも含む歴史的な検討なども手付かずのまま残されている。とはいえ、これらは、いずれも、今後時間をかけてとりくむべき大きな課題であり、本論文によって、その内実が明確化されたものである。以上により、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。